



山梨県にある富士五湖の一つである精進湖から望む初夏の富士山。本学会誌に掲載された自身の最初の論文は、この精進湖に生息する外来魚オオクチバスの生態調査に関する内容だった。以来、この魚とは長い付き合いが続いている



文 角田裕志

埼玉県環境科学国際センター/
「野生生物と社会」学会 理事・事務局長

巻頭エッセイ ESSAY

「書く」こと責任と意義

近年のコミュニケーションツールの発展によって研究成果の発信手段は多様化している。しかし、論文が科学研究において最も基本的かつ重要な研究発表の手段であることに変わりない。

学術研究に携わる者にとって、論文が学術雑誌に掲載（または受理）された時の喜びは格別である。これまでの努力が報われたことの達成感と共に、成果公表の責任を果たした安堵感が入り混じる瞬間である。掲載後に外部から別刷り（最近ではもっぱら電子ファイル）を請求されることがあるし、最近では論文の被引用数に分かるサービスマル多数存在する。自身の研究成果が研究者コミュニティの中で認知され、新たな研究発展に少しでも役立ったかもしれないと考え、次の研究へ歩みだす意欲にもなる。

一方、野生生物と社会に関する研究の成果は、学術的な知見と共に現場の課題解決への貢献も求められる。自治体の資料等に論文が引用されでもない限り、発表した成果が社会や現場の役に立っているのかを知ることは難しい。しかし、稀に実務者の方から「あの論文を参考にした」とお声掛けいただくこともある。些末な内容であっても自身が行った調査研究の結果をきちんと「形」にすることの責任と意義を実感する。

本学会誌は昨年度からJ-STAGE*で公開され実質的なオープンアクセスとなった。掲載論文は社会に広く発信され、現場の目に留まる機会も増えるだろう。本学会誌が、学会と社会や現場とを結びつけるツールとなつて、課題解決に一層貢献していくことを期待したい。

* J-STAGE:日本の科学技術情報の電子ジャーナル出版を推進するプラットフォーム(本学会誌の巻頭一覧: <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/awshwhs/list-char/ja>)